http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.096　16/10/12

笙・篳篥・龍笛

東儀秀樹さんをご存じだろうか？　作曲家・音楽家で、独立される前は宮内省の楽士として活躍した雅楽の第一人者である（詳しくはネットなどで調べてみよう）。その東儀さんが雅楽を紹介する文章を書いている。面白いし、古文の勉強とも関連してくるので、２回にわたって紹介しよう。(「雅楽　そのグローバルな魅力」　學士会会報2016ーⅣ　No.919より）

＊

雅楽はよく「神社の音楽」と言われますが、元々は「寺の音楽」でした。千四百年前、飛鳥時代の日本に仏教が伝来した時に一緒に入ってきたのです。当時の日本人は神道を守っていましたが、仏教を敵視せず、好奇心で迎えました。今でも神社の境内にお寺があったり、お寺の境内に神社があったりします。この日本人の大らかさは他の国では考えられないことです。

雅楽は日本に伝来して以降、音色も楽器の形も一度も変わることなく、失われることもなく、生き続けてきました。現在、大陸のどこを探しても、昔のままの音色も楽器も楽曲も残っていません。それらが今なお残るのは、世界中で日本だけなのです。

雅楽で中心的な役割を果たすのは、三種の管楽器、「笙」（しょう）「篳篥」（ひちりき）「龍笛」（りゅうてき）です。「笙」は、十七本の竹を束ねたような形をして、そのうち十五本の竹の根元に金属のリードが付いており、息を吹いたり吸ったりしてそのリードを振動させ、音を出します。主に和音を奏でます。昔の人は笙の音色を「天から降り注ぐ光」と表現しました。楽器の姿は、鳳凰が翼を立てている姿と伝えられます。西洋のパイプオルガン、アコーディオン、ハーモニカのルーツと言われます。

「篳篥」は、わずか十八㎝の竹筒に葦を削って作ったリードを差し込み、そのリードから息を吹き入れて音を出す縦笛です。竹の表に七つ、裏に二つ、計九つの指穴があいています。主に主旋律(メロディ)を奏でます。音域は狭く、男性が普通に出せる声の範囲とほぼ同じで、一オクターブを少し超える程度です。そのため、篳篥は「人の声」、つまり「地上の音」を表すとされました。人は時に深く抑揚を付けて歌いますが、篳篥もそのように抑揚をかけて演奏されます。西洋のオーボエ、クラリネット、サクソフォンなどのルーツと言われます。

「龍笛」は、七つの指穴がある横笛で、二オクターブの音域を持ち、主に副旋律を担当します。天と地の間を行き交う「龍の鳴き声」を表すとされます。つまり、天と地の間の空間を象徴しているのです。

この他に、「琵琶」「箏」という二種の弦楽器と、「太鼓」「鞨鼓」（かっこ）「鉦鼓」（しょうこ）という三種の打楽器があります。

以上の楽器を用いて行われる演奏形式を、「管弦」と言います。雅楽はオーケストラと同じで、管楽器、弦楽器、打楽器から構成されます。こうした演奏形式が東洋では約二千年前から存在し、音楽理論も確立していたと言われています。その意味で雅楽は「世界最古のオーケストラ」と言えます。演奏する際、全ての楽器が揃う必要はありませんが、三種の管楽器は必須です。雅楽の基本は「笙」と「篳篥」と「龍笛」の合奏なのです。これは「天」「地」「空」を合わせる、つまり、「音楽表現がそのまま宇宙を創る」という思想です。　（つづく）